

2006年(平成18年)1月17日(火曜日) [18]

清水次郎長と 明治維新

①



晩年の清水次郎長像

呼んで大変かわいがり、東 郎長のことを伝えてくれ
京の山岡鉄舟の所へもいった。虎次郎といその子が璋
で、私の父である。
次郎長が兄の娘を養子に
して嫁がせた高田家は、藤
原南家が徳の流れをくむ入
江氏を先祖に持ち、南北朝
の争いで甲斐の国にのがれ
た。甲斐の武田氏が清水に
築城した際にも入江
亡くなったの
(静岡市清水区の西)に移
住した。高田家のほたい
らない。しかし 寺、法雲寺の記録は一六
し由比町の綱 二四(寛永)年没の水引
元小倉家の出 角石衛門の名、五代將軍綱
身で虎次郎の 吉の時代の高田平十郎など
妻となった がある。一八八二(明治十
五)年没の治助の子が元吉
で生きて、次
である。

侠客の生きた時代

“出番”なくなり苦悩

私はこうしたことを知っ ことを書いています。彼女は
てはいたが、これまで公に 私の父の姉が静岡市の和菓
はしてこなかった。公にす 子店、松柏堂に嫁いた先の
るきっかけは小説家の諸田 孫にあたる。
玲子さんがさかんに「自分 そんな縁緯で直系の先祖
の先祖は次郎長と言ってい である次郎長のことを書い
ていることにある。彼女は古 た。けんかやばくちに明け
川英治新人賞をもらい昨 替れた次郎長は明治維新、
年、日経新聞夕刊に小説を 多くの人の出会いを通じ
連載しているが、「坐漁の て変わっていった。次郎長
人」などで大政や次郎長の は困難な時代をどう生きた
た。

江戸時代は、刑法はある
ていど決められていたが、
民法は厳格でなく、問題が
起ると地元の前役などの
出番となり、それでも決着
しない場合は侠客(きょう
か)が解決した。しかし
明治に入って法が整備され
ると、侠客の出番はなくな
った。

たかた・あきかず 19
35年生まれ、清水市(現
・静岡市)出身。慶応大医
学部卒、同大学院修了後、
米ニューヨーク州立大助教
授を経て浜松医科大学教授。
2001年に退職した。脳
や健康について講演や著述
活動を行っている。



次郎長の墓前にたたずむ高田
明和さん—静岡市の梅嶺寺で

次郎長はこのことに悩ん
でいた。一方、新政府は俠
客が不調士族と組んで問題
を起すことを恐れた。当
時、次郎長と覇を競った黒
駒勝威や岐阜の弥太郎は官
軍の先鋒隊として官軍のた
めに働いたのに、過去の罪
状を理由に処刑された。
次郎長の生き方に大きな
影響を与えた山岡鉄舟は、
明治天皇の侍従を務め、静
岡県令(知事)にはなっ
たが、政府からは反乱を起こ
すかもしれないと強いら
れ、一方の旧幕臣からは政
府に取り入っているとし
て、命を狙われたこともあ
った。
政府の官憲も旧幕臣も信
頼ならない時に百人以上の
手下をもつ次郎長はもつと
も頼りになる人物だったの
である。

2006年(平成18年)1月18日(水曜日)

清水次郎長と 明治維新

②

旧脚本であり、徳川慶喜の警護隊長、高橋泥舟の妹を妻にしたような家系の山岡鉄舟は、なぜ次郎長とあこれほど親密になったのだろうか。

二人の出会いには、一八六八(明治元)年に脱藩浪士を集めて新政府を作ろうとした榎本武揚の船隊に属する咸臨丸が、嵐のために清水港に漂着したところにある。政府は三隻の軍艦を送り、咸臨丸を襲って、乗組員全員を惨殺した。

死体は何日間も清水港に漂い、死臭も著しかった。

山岡鉄舟のこと

次郎長を感動せよとの意見が高まった。当時、静岡の参事をしていた松岡風ゆするが次郎長に会



山岡鉄舟

考え方に共鳴 親密に

命じられていた。次郎長はとがめに対し「死んだ者は皆仏で、敵味方はない」と答えた。

これが鉄舟の心を打ち、鉄舟は「壮士の墓」と揮毫(きぎょう)をし、さらに次郎長に「砂広くして孤松秀で」という詩を贈った。

鉄舟は東京に戻ってからも侍従の仕事が終わると歩いて箱根を越え、三島の鹿

命じられていた。次郎長はとがめに対し「死んだ者は皆仏で、敵味方はない」と答えた。

これが鉄舟の心を打ち、鉄舟は「壮士の墓」と揮毫(きぎょう)をし、さらに次郎長に「砂広くして孤松秀で」という詩を贈った。

鉄舟は東京に戻ってからも侍従の仕事が終わると歩いて箱根を越え、三島の鹿



祖母いそさん(左)に抱かれる高田明和さん。右は母とき子さん

い、さらに鉄舟に引きあわせた。当時、次郎長は監督府判事だった貞松藩の伏谷如水から清水港一帯の治安を守る探察方(警護役)を

い、さらに鉄舟に引きあわせた。当時、次郎長は監督府判事だった貞松藩の伏谷如水から清水港一帯の治安を守る探察方(警護役)を

2006年(平成18年)1月19日(木曜日)

山岡鉄舟が建立した全生庵⇒東京都台東区谷中で

清水次郎長と 明治維新



禅の境地

③

鉄舟が禅の印可を受けた時、東京・湯島の江川鉄心寺に知られている。一八〇の家に入った天龍寺の滴水老八〇(明治十三年三月三日)に見解を述べ、禅の印可十日、朝まで座禅をして、堂々たる姿に江川は「自分なせは雲のように自分を覆もなんとかにあれくらいは消えていた。その場に呼ばれた浅利も鉄舟が無敵の境地を得た」と認め、剣し、名僧として知られる山の印可を与えた。鉄舟は当

田無文老師は「坐禅和讃講ついた垢(あか)を落とす方法」と述べたという。私の祖父、虎次郎は「次郎長は居間に座布団を敷いて庵の離れに鉄舟居士の娘さまと妻んである。松子さんというおばあさんがおられて、子どもは清水の次郎長親庵で山田無文老師にお会い分におぶつてもらい箱根をしたことがある。全生庵は越したことがあるという古鉄舟が幕末、明治維新のい話をよく聞きました。お隣、国事に殉じた人の菩提をとぎ合の紅葉がとてもうつしくしたので、「いいや、あれをとっておくれ」と言つと、次郎長が「お嬢、関係する者だと申し上げたさん、そりゃ先生の公案よ」と言、一「ああ、松子さん

鉄舟譲り悟りへの道

せましたら、実に天眞であり、ありのままの姿であると言つて、多いに称賛

がいつも清水の高田に行く。問答の中でこう述べてい「私に近、え、東海道の俠五と(仕事)も今はあきは田というのほどなたかといつも氣にしていた」と、大客(きょうかく)、次郎長のてで、さきだつさい(妻)変遷はれた。鉄舟は東京の辭世の歌が目に触れましに遭つぞつれしき

全生庵の中にある山岡鉄舟の墓



たかだ・あきかず 1935年生まれ、清水市(現・静岡市)出身。慶応大医学部卒、同大学院修了後、米ニューヨーク州立大助教授を経て浜松医科大学教授。2001年に退職した。脳や健康について講演や著述活動を続けている。

浜松医科大学名誉教授 高田 明和

2006年(平成18年)1月20日(金曜日)

清水次郎長と 明治維新

④

天田五郎(後の愚庵)はた。福島県いわき市の生まれで、戊辰(ぼしん)の役の際に両親と妹と生き別れた。なんとか家族に会いたいと全国を歩き回った。東京では小池馨詳の家で縁あって山岡鉄舟を知った。

一八七七(明治十)年に小池が死去、家族を連れて

京都に向かう途中に江尻の宿に泊まり、鉄舟の知り合いといふことで次郎長に会った。五郎に会ったこと、西地方行幸にお供した際に聞いた鉄舟は次郎長を呼んで「五郎をなんとか一つ所にとめておきたい、つい

てはお前さんの養子にし受け取り、すぐに鉄舟を追

ては、静岡で面会した。この話を聞き、「一名次郎長

れた。最悪の事態を避けるには次郎長のことを中央政府や静岡県の役人に知らせる以外にないと考えた。そこで思いついたのが五郎の書いた次郎長伝であ

「東海遊俠伝」生みの親

幕臣であった鉄舟は親や兄妹を探して日本中くまなく旅している五郎の純真に心を打たれた。しかし五郎は無鉄砲なところが、不満浪士があふれている時期に鹿児島に行き、さらに台湾に妹が売られているのではないかと台湾征伐にも参加した。鉄舟は戦争に巻き込まれる可能性もあるところに平気で出かける五郎のことが気が気でなかつ

天田愚庵のこと



天田愚庵

時に次郎 当時、自由民権運動が武る。長も宿舎 器を持つ俠客(ききょう)かと呼び、くまと結びつき、愛知事 五郎は次 件、群馬事件などの反乱が 郎長に預 相次いだ。政府は最も強力 けられ 部下の集団をもつ次郎長 を警戒し、何とか理屈をつ 五郎は けて逮捕したのである。 文才があ 一方、俠客が理屈をつけ ったの ては逮捕され、裁判もなく 造である。 次郎 処刑されていたことを知っ 長の過去 ていた鉄舟は、次郎長が殺 りはないが私の祖先にあた の出入り 害されるのではないかと恐る。

終わり

ふるさとを語ろう

生理学者 高田明和さん

学者で小説も
林先生の存在
強く印象に

家は清水市東大曲(現静岡市清水区)にあり、小学校のころは毎日のように江尻港に遊びに行っていた。父は海に飛び込み、目を探って遊んだ。時間がたつのも忘れて泳いでいた。父は「遊ばない人には理系を目指す」と話した。父は旅順などの事業をしてい

「面白い人には理系を目指す」と話した高田明和さん



清水での出会い 財産に

だが、あまり成功したとは言えない。ただ清水市教育委員長をしていながら教育には熱心だった。将来、医師になろうと思ったのは清水一中に入ったころ。ある日、一番上の姉と遊んでいた静岡製薬学専門学校の現職大先生、その教科書を見せられた。慶応大教授の林健太郎先生は「生理学者か」と先生に話した。私の母方のいとこは商

という本だ。姉が「林先生はとて偉い先生で、小説も書く」と教えてくれた。林先生は日本にパフプロの条件反射を紹介した大脳生理学者で、直木賞作家でもある。本の内容より、有名な学者で小説も書くというところが、強く印象に残った。

面でも才能を発揮した井出孝さんと米田史研究で知られる歴史家井出義光さん(現慶応大名誉教授)という秀才がいて、彼らは旧制静岡高校から東京大に進んだ。二人はマントを着てドイツ語を口に、よく議論していた。私は井出さんに行くたびに、旧制高校に行きたいと思っていた。そこで林先生が現

れたわけだ。「有名になれ」師の励ましで「一中に残る」

小説家としても成功した人は多い。それを一中にいた川端政雄先生に話すと「頑張れ、必ず有名になれ」と励まし、でてて私の家からは清水二中に行けなくなった。川端先生は一中に残る。先生、姉の本が私に影響を

与えた。林先生はその後、私の大学時代の指導教員になり、仲人もしてくれた。「自力でやる」浜松の気概 街発展の活力 私の小さいころと比べても今の清水はあまり変わっていない。商工業など規模がそれほど大きくないだけに、駅周辺などに今も昔の雰囲気が残っている。静岡市は文化も豊かで、清水にいた私から見るとあのころの都会だった。私は米田から帰った後二十数年間、浜松市で過ごした。その間、学会や研究会開催などで多くの経済人と会った。彼らは自分の事業に何のプラスにもならない医学の基礎研究を応援してくれた。「中央に頼らず自分の力でやる」という気概があった。好奇心も旺盛。活力や力強さを感じる。街が大きく変わっているのはそんな活力のせいだろうか。静岡市の文化的なレベルは魅力だが、私が愛着を感じるのはいは清水です

たかだ・あきかず 1935 (昭和10)年12月、静岡市清水区生まれ。江尻小、清水一中、清水東高から慶応大医学部に進み、同大大学院修了。米田で研究生活を送りニューヨーク州立大助教を経て75年、浜松医科大学教授。2001年に退官。2000年には第15回国際統計学会会長を務めた。医学の教科書十数冊のほか130冊を超える一般向け著書がある。8人きょうのうちの三男が医師となり、長男の高田さんのほか、三男典彦さんは浜松市で整形外科医を、四男忠敬さんは帝京大外科主任教授、清水次郎院長の子孫でもある。東京稲田区在住。

(聞き手・橋本誠) 日曜日掲載